



みどりの風

平成27年3月2日発行
校報 第517号
〔みどりの風 第60号〕
練馬区立関町北小学校

桂林荘雑詠 示書生

校長 大野 泰弘

今年、某放送局の日曜日の大河ドラマは、松下村塾を開塾し、多くの門下生を輩出した吉田松陰の妹・文を主人公にしています。

その吉田松陰の松下村塾と福澤諭吉の慶應義塾とならんで、我が国における三大私塾の一つに数えられているのが、右の漢詩の作者である広瀬淡窓が始めた「咸宜園」です。

咸宜園は、その名の通り、咸(みんなが)宜(よろしい)園(場所)ということで、江戸時代の身分制度がある中で、入学金を納入して、名簿に必要な内容を記入すれば、身分、出身、年齢、男女などを問わず、だれでも入塾することができたのだそうです。

その咸宜園の前身が「桂林荘」で、そこで、各地から新しい学問を学ぶために集まってきた学生に対して語られたのが、右の漢詩でした。

この漢詩は、「桂林荘雑詠示書生 四首」の中の2番目の詩で、国語の教科書にも掲載されるほどの有名な漢詩です。桂林荘は、1805年(文化2年)に、豊後国日田(今の大分県日田市淡窓町)

に建てられました。桂林荘の近くには川が流れていたため、水を汲むのは比較的容易でしたが、山から薪を拾ってくるのはかなりの重労働であったようです。桂林荘には、塾生のための寮も併設されていたということですが、この漢詩は、その寮生活の厳しさと楽しさを詠ったものとも言われています。この詩の意味は、

桂林荘雑詠示諸生
廣瀬淡窓
休道他郷多苦辛
同袍有友自相親
柴扉曉出霜如雪
君汲川流我拾薪

見知らぬ土地で学問に励むときには、苦しいことや辛いことが多いと言って、嘆くのはやめよう。

君たちの寮には、一枚の着物を譲り合って着るように、共に苦労などを分かち合える仲間がいるではないか。

夜明け前、塾舎の柴の折戸から外に出てみると、霜が雪のように白く降りていて、心が引き締まるようである。

さあ、君たちは川に行って水を汲んできたらいい。私が、山に分け入って、薪を拾ってこよう。

という感じでしょうか。

さて、本校の言語能力向上拠点校としての3年間に及ぶ研究活動は、まもなく終了いたします。研究発表会を一つの目標として、子どもたちの言葉の力を高めていくために、研究主任を中心として、すべての教職員が心一つにして「苦労が多い、辛い」といった弱音を吐くこともなく、国語科の授業実践に取り組んできました。この間、多くの保護者の皆様のお力添えをいただき、そして、地域の皆様にもご理解を賜りました。その研究成果は、子どもたちの読書意欲、伝え合う力、説明的文章の読解力等の向上に見られ、私たちも研究活動に対する達成感を高めることができました。

しかし、私たち教育に携わる者の研究・研修に終わりはありません。国語科の研究を通して得られた成果を継続しながら、今後の子どもたちに求められる資質・能力を高めていくために、新たな視点から研究をすすめていかねばなりません。「霜、雪の如し」ではありませんが、新年度を迎える前に、今一度心を引き締めることが求められます。

そして、教職員自らが「薪を拾う」が如く、新しい課題を発見し、その解決策を多方面から考え、研究実践への道筋を付けていかねばならないと考えています。

校内では、国語科の研究成果を継続するべく、一つの研究の柱は国語科に置き、新たな研究の柱として、心と体の健康づくり、つまり、体育科を中心として、本校の子どもたちの体力を東京都の平均以上に高め、生涯にわたって、自らの心と体の健康を大切にできる、そんな子どもたち一人一人に育ってもらえるような教育環境を整えていきたいと考えています。

詳細は、新年度の保護者会等で説明させていただこうと思っています。なお、学校評価の結果とそれに対する学校の回答等については、後日あらためてお配りいたします。

今年度、皆様から頂戴したご厚情に深く感謝を申し上げ、来年度も引き続きご支援のほど、お願い申し上げます。